

言語学に「言語」は必要か

ことばの学問をだいなしにする張本人はことばです

—ソシユール「ジュネーヴ大学就任講演」

1

言語学とは「言語を科学的に研究する学問」であるというの、どんな言語学の教科書にも書いてあるきまり文句である。それではその「言語」とやらはいったいなにかとひらきなおってきかれても、はっきりしたこたえはみつからない。もちろん、「言語とはなにか」という究極的な問いにたいしては、研究が最終的に到達した地点でこたえるべきものであって、研究の端緒としての「言語」は具体的で直感的な対象にとどまる。しかし、それにもかかわらず、直感的対象としての「言語」のすがたがまったく自明ではないという

ところに、言語学に特有の困難がある。

この事態にだれよりもあたまをなやませたのが、構造言語学の祖とされるソシユールである。ソシユールは『一般言語学講義』の冒頭で、言語学そのものがかえた困難をこういいあらわしている。「他の科学でみると、あらかじめあたえられた対象をとり扱い、ついでこれをいろいろの観点から眺めることができる。われわれの領域ではそうはいかない。……「言語学においては」観点に先だって対象が存在するのではなく、いわば観点が対象をつくりだすのだ。」(Saussure, 1972, p. 23)

もちろん、言語学以外の領域においても、対象が観

糟 谷 啓 介

点に先立って、いわばはだかの事実として存在することはない。科学における対象はつねになんらかのバラダームのもとでのみ把握され、観察事実といえども「理論負荷性」をになっているというのは、ハンソンやクーンが説いて以来いまではよく知られたことである。にもかかわらず、言語というものには、ほかのあらゆる人間現象とは根本的にことなるところがある。なにかを科学の「対象」とするためには、そこから距離をとり、その対象の外部にたたなければならぬ。ところが、わたしたちにとって「言語」の外部などは存在しない。わたしたちが言語からぬけてて言語を外から観察できるような地点はどこにもないのである。

そこでソシュールはひとつの自覚的な観点をえらびとる。ソシュールは「言語とはなにか」と一般的に問うことはしなかった。ソシュールのたてた問いは「言語学が対象とすべき言語とはなにか」であり、さらに「話し手の意識にとって真に実在的である言語のすがたはいかなるものか」というものであった。このふたつの問いが接合されるところに、ソシュール理論の独

自性があらわれる。

ソシュールは、はじめもなくおわりもない織物のような多様きわまりない言語の現実相を「ランゲージュ」とよぶ。このランゲージュは「同時に物理的、生理的、心的」であり、「個人的領域にも社会的領域にもぞくする」という、かぎりなく混質的なすがたをしめすため、そのままでは言語学の対象にはなりえない。そこで、ソシュールはランゲージュのなから、「言語活動の行使を個人に許すべく社会体が採用した制約の総体」である「ラング」をとりだし、そこにこそ言語学の基礎をおくべきだと主張した。個々の話し手はこのラングにもとづいて具体的発話を実現するのであり、それらの実現体は「パロール」とよばれることになる。(Ibid. p. 25)

ランゲージュ／ラング／パロールというこの三分法は、その後、さまざまな論者がおもいおもいの角度から論じてきた。ここでは深遠なソシュール解釈学には深入りしないでおこう。ここでのべた説明にしても、あくまでとりあえずのものであることはことわってお

く。

ところで、ランガージュ・ラング・パロールとぶざまなカタカナ書きをしなければならぬのは、適切な日本語の訳語がみつからないからである。邦訳書のような「言語活動・言語・言」という訳語では、日本語としていかにもすわりがわるい。「言語活動」はまだしも、「langue」はたして「言語」だろうか。さらに「言」となるともうわけがわからない。しかし、このことは、日常語ではなく生硬な漢語を訳語にえらばざるをえないという日本語の特別な状況だけがわざわざいしているのではない。じつは、フランス語のいたって日常的な用法にもとづくソシュールの三分法を翻訳すること自体が至難のわざなのだ。

英語においてもソシュールの三分法をいいあらわす定訳らしきものはない。なかでも、もっともむずかしいのは、英語の“language”がフランス語の“langage”と“langue”のふたつの意味領域を区別なくおあってしまっている点である。フランス語の“langue”はある特定の社会に固有の言語をなし、“lan-

guage”は一般的な意味での人間のことばや特定のことばづかい、さらにはそれに類比的なコミュニケーション手段をさすのだが、英語の“language”はこのふたつの意味領域を無差別にさすことができる。「動物言語 (animal language)」や「花」とは (language of flowers) は、フランス語ではあくまで“langage”であって“langue”ではない。英語の“language”とフランス語の“langue”は、ソシュールのいいかたにならうなら、ある種のコンテクストではおなじ意味となりうるが、体系内での語の価値がことなるのである。

英語圏でながらく親しまれてきたバスキンの英訳では、“langage/langue/parole”はそれぞれ“human speech/language/speaking”と訳されており、デ・マウロは「これが決定的なものになるかと考えられる」(De Mauro, 1976, p. 427) と評していた。しかし、あたらしく『一般言語学講義』を英訳しなおしたロイ・ハリスは、“langage”は冠詞なしの不可算名詞“language”、“langue”は冠詞付きの“a language”と訳すべきだとこう (Harris, 1980, p. 29)。

「ランガージュ・ラング・パロール」という用語がたやすく翻訳できないことには、ソシユールも気がついていた。ソシユールによれば、ドイツ語の“Sprache”は“langage”と“langue”の両方をふくむ。また、“Rede”はほぼ“parole”にあたるが、そのほかに“discours”の意味もふくむという。しかし、このことにいらだったかのようにソシユールは、「われわれはことばではなしに、ものを定義した」といい、「ものを定義するにあたってことばから出発するのはよくない方法である」と議論をうちきるのである(Saussure, p. 31)。けれども、デリマウロが指摘したように、ソシユールのこういういいかたには、ソシユール自身が攻撃してやまなかったはずの「実証主義的な匂い」(De Mauro, 1976, p. 426)つまり、コトバにさきだつてモノが厳然とあるという考えかたがつきまよっている。じつはソシユールは、『一般言語学講義』のなかで「ラング」の十全たる定義をいちどもかかげていない。日常的用法では「〇〇語」をさす「ラング」をいちおう術語として採用し、まずそれを「社会体が採用した

制約の総体」として把握し、究極的には「記号の純粹価値の体系」にまで深化させていくという「観点」の深化の過程こそが、ソシユールの思考の特色なのであるが、その結果、「ラング」概念にはいくつもの層が不分明のままつかみかさなることとなるのである。

コペンハーゲン学派のイェルムスレウは、こうしたラング概念の錯綜を整理して、ラングの領域を、実現体にかかわらない記号の純粹に形式的な体系である「図式」、社会のなかで実現される一般的な型としての「規範」、じっさいの実現体の集合としての「慣用」のみつつの領域に明確に区分した(Hjelmslev, 1943)。「観点が対象をつくる」という命題を、科学的対象の設定のためには一貫したメタ言語の確立が必要不可欠だというようにとらえるなら、ソシユールよりもイェルムスレウのほうがずっとすじがとおっている。「ラング」「パロール」といったソシユールの概念は、真偽を確定するための一義的なメタ言語であるよりも、発見の過程のみちびきとなるメタファーによほどちかひのだ。

このことはソシュールがめざした言語理論の根本的問題とかかわる。ソシュールは、「話し手の意識」を無視し、ありもしない抽象的カテゴリーが現実中存在しているかのようにみなす従来の言語学のありかたに嫌悪をもよおしていた。その意味で『一般言語学講義』は「言語学批判」の書であるというのはあたっている(丸山、1988)。言語を超越的視点からとらえ、そこから見れば安心して言語の本質をとらえることのできるような展望台を用意してくれるようなメタ言語を、ソシュールは信用していなかった。だからこそソシュールは、言語学に「真正正銘あらゆる出発点の必然的な不在」(前田、1989, p. 163)をみるしかないのである。「観点にさきだって対象が存在しない」というソシュールのことばは、メタ言語の確立の要請ではなく、言語をもちいて言語を語るというこの言語学の逆説的ないとなみにたいする深い懷疑から発したものだ。「ことばではなく現実をみよ」という一見わかりやすいこの格言じみだいいかたがもっとも適用できないのが、まさに「言語学」という領域なのである。なぜな

ら、言語学における「現実」とは、やはり「ことば」であるしかないからである。

2

「言語学のゆいいつの真正の対象は、それ自体としての、それ自体のためのラングである」(Saussure, p. 317)という『一般言語学講義』をむすぶことばは、編者であるバイイとセシュエの創作であることがわかり、いまではすこぶる評判がわるい。悪評の理由のひとつには、この文句によってソシュールがパロールを排除した静態的言語学をめざしているかのようにうけとられてしまったが、それはソシュールの真意とはことなるということがある。けれども、「ゆいいつ真正の」という部分にはたしかに問題はあるにせよ、混質的言語活動のなかからの「ラング」の抽出がソシュールの目的のひとつであったこと自体はさほどのはずれとおもわれない。問題なのは「ラング」うんぬんではなく、ここでいう「対象」とはいったいなにかということである。

ラングの概念については、これまでさんざん議論されてきた。これはいったいなにをさしているのかについては、これまで研究者のあいだで意見の一致を見ることはなかったし、これからもないだろう。にもかかわらず、ひとつの誤解だけはさけなければならぬ。それは、ラングはすなわち「〇〇語」のことだという誤解である。いまではすくなくなったが、かつてラングを「国語体」と訳してすませている本もあるにはあった。

ソシュールによれば、わたしたちが目のまえにしているのは、混質的でとらえどころのない言語活動の総体であり、言語学はそこから同質的な「ラング」の体系を抽出しなければならぬ。したがって、ディマウロがのべるように、「言語学の対象はラングである」というさいの「対象」の意味は、研究が到達すべき「目的」、アリストテレスの意味での「テロス」なのである(De Mauro, pp. 413-4)。けっして、「ラング」があるのままの現実として目のまえによこたわっているわけではないのだ。「ラング」は言語学が発見するべき理

念的構成物なのである。

ここで問題がおきる。論理的にいうなら、なんらかの対象の内包を抽象するためには、その対象の外延がまえもってしられていなければならぬが、その外延の範囲を規定するものこそ内包的性質なのである。つまり「ラング」の体系を抽象するためには、あらかじめ「ラング」の外延を決定しておかなければならないという循環におちいるのである。さらにまた、言語記号の体系はその外部にまったく依存しない自律性をもつ。となると、体系相互の関係は体系内の要素間の関係とはべつの次元にあることになり、体系内部の論理で決定することはできないはずなのである。わかりやすくいえば、日本で話されていることば(ラング)のなかからひとつの「日本語」(ラング)を抽象すべき論理的必然性、さらに、奈良時代に畿内で話されていたことばと現在東京で話されていることばに歴史的同一性を見いだし、それらふたつをおなじ「日本語」ととらえる論理的必然性は体系そのもののなかにはまったく存在しない。

したがって、言語学者は現実のランガージュのなかからラングの体系をひきだしているようにみえても、事實は「○○語」という前理論の対象を自明の前提として分析をすすめているのである。もちろん、ここには論理的にみてきわめて不明瞭なところがあるのはいうまでもない。だから、言語学者のなかには、存在証明のできていないそうした前理論の対象を拒否するものさえいるのもふしぎではない。

3

言語学において、「言語 (Language)」という概念は日常的用法の延長としてつかわれることもあれば、記号相互の関係をさだめる体系といういたって専門的な意味でもちいられるときもある。もちろん、「○○語」はすなわち言語記号のつくる規則的体系であるところあるなら、この両義性は解消するだろう。しかし、この両者のあいだにこえがたいへだたりを見いだす者にとっては、このふたつの概念の混同ほど腹立たしいことはない。そうしたなかにチ ヨムスキーがいる。

チ ヨムスキーが現代言語学にもたらした「革新」については、チ ヨムスキーに賛成する側からも反対する側からもさんざん語られてきた。言語の構造は「ヒト」という種に生物的にそなわった普遍的な能力にもとづくという生得主義と普遍主義をひっさげて登場した生成変形文法は、それまでの言語研究を一変させるだけの衝撃力があつた。ただし、チ ヨムスキー理論が真の意味で革新的だったのは、かれの提示するさまざまな概念や方法論、そして研究のプログラムがあたりしかつたからだけではない。チ ヨムスキーが言語学の対象を「言語」から「文法」に転換させたということが、画期的なことだったのである。

チ ヨムスキーによれば、人間にとっての言語の本質の意味は、こどもがかざられた言語経験しかもたないにもかかわらず、いままでいちども聞いたことのない文を生成したり、はじめて聞いた文の文法性を判断できる能力を獲得することにある。この事実を理解するためには、人間は生得的な言語能力をもっていることを想定しなければならないとチ ヨムスキーはかんがえ

る。こうして、人間の生得的言語能力を解明することが、言語学の最終目標となるのである。

チョムスキーは人間に生得的にそなわる言語能力の初期状態を「普遍文法」と名づける。つまり、チョムスキーのいう「普遍文法」とは、地球上で話されているさまざまな言語から経験的に抽出された言語の普遍的特性をさすのでもなければ、論理的条件にもとづいて規定される言語の可能態でもなく、脳のなかに実在するメカニズムそのものをさす。チョムスキーによれば、この初期状態はさまざまなパラメーターをもっており、個々の言語によってそのパラメーターの決定値はさまざまに選択される。そうした個々の言語に特有のパラメーターが決定された状態で、個別言語の文法がつくられ、恒常的システムとして脳に定着する。

ただし、この言語の文法をあきらかにするために、言語能力が初期状態から出発して一定の恒常的状态に到達するまでのプロセスの決定にはかかわらない、さまざまな不純物を排除しておかなければならない。そこで想定されるのが「均質的な言語共同体における理

想的話者」という仮構の像なのである。「理想的話者」といえばきこえはいいが、じつのところそれは、みずからの内的システムだけにもとづいてことばを話す脳のことだといったほうがよい。

チョムスキーは、これまで言語学は精神 \parallel 脳のメカニズムとは関係のない「外的言語 (externalized language)」だけを研究してきたが、これからは精神 \parallel 脳のなかの「内的言語 (internalized language)」のメカニズムの研究に焦点をうつすべきだという。そして、こうした方向で研究をつづけるなら、言語学は心理学のなかに組みこまれるだけでなく、さらに脳のなかの認知システムの研究という意味で自然科学、とりわけ生物学のなかに地位をしめることになるだろうとチョムスキーはいうのである。(Chomsky, 1986)

ここまでくると、チョムスキーのいう「内的言語」というものが、日常の意味での「言語」とはあまりにかけはなれてしまっているのはあきらかだ。どちらをグロテスクと感じるかはひとによってことなるだろうが、どうやらチョムスキーは「言語」の概念のほうに

奇怪さを感じるようで、たびたびいらだちをあらわにしている。

チョムスキーはこういっている。「まず第一に、言語 (language) の常識的な概念は決定的に社会政治的な次元をもってしている。さまざまな『中国語の方言』どうしはロマンス諸語どうしとおなじくくらい異なるにもかかわらず、わたしたちは中国語のことを『ひとつの言語』とみなしている。オランダ語とドイツ語はふたつのこととなる言語とみなされているが、ドイツ語の方言のなかには、いわゆる『オランダ語』の方言にきわめてちかく、ほかのいわゆる『ドイツ語』の方言とは相互に理解しあえないものもある。言語学の入門書には、言語は陸軍と海軍をそなえた方言だというお決まりの (マックス・ワインライヒによるとされる) 文句がよくかかげられる。このような意味での『言語』になんらかの一貫した説明をあたえることができるかどうかは、はなはだうたがわしい。たしかに、そんなことはだれもできはしなかったし、まじめに手をつけようともしなかった。むしろ、あらゆる科学的アプローチ

チは、日常的用法で『言語』とよばれるものの要素をすてさってきたのである。」(Chomsky, 1986, p. 15)

こうしてチョムスキーは、「根本的な概念は文法および文法を知っていることであり、言語および言語を知っていることは派生的である。……この『言語という』概念なしですませることさえできるかもしれないし、たとえそうしたところで失うものはほとんどないであろう」とまで断言するのである。(Chomsky, 1984, pp. 169-70)

このようなチョムスキーでさえ、いかに「均質的」とはいえ「言語共同体」なるものを想定しなければならぬのは、みかたによれば皮肉なことである。ところが、その「言語共同体」とやらも、「理想的話者」とおなじくはなはだしく現実ばなれしている。チョムスキーによれば、複数の言語が話される言語共同体は普遍文法の観点からみて「不純」なものともみなされる。なぜなら、そこでは普遍文法のパラメーターの決定が多方向からなされる結果、選択肢の決定が「矛盾的」なものになるからだという。(Chomsky, 1986, p. 17)

ある連続講演の席で、チョムスキーは、聴講者からつぎのような質問をうけとった。子どもはふたつの言語を、ひとつは家で、ひとつは外でというように、同時にまなぶことができる。このことはあなたの理論ではどういう意味をもつのかと。チョムスキーのこたえはこうだ。「これは非常に重要な問題で、私は今までずっと、こんなことは起こり得ないと思おうとしてきたのです。この問題は非常に不思議なのです。質問に挙げられた例はとても衝撃的だといえます。なぜなら子どもは別々の言語を覚えるのです。たとえば、家ではスペイン語を、外では英語をという具合です。」

(Chomsky, 1989, p. 186)

わたしにいわせれば、質問者のあげた事実よりもチョムスキーのこたえのほうが、よっぽど「不思議」「衝撃的」だ。質問者はとりたてて特殊な事例をあげたわけではない。世界の現実からみれば、「複数言語使用」は異常な状態ではまったくない。個人的レベルではもちろんのこと、言語共同体レベルにおいても複数の言語をつかいわけるといふ例は、かずかぎりなく

ある。それにもかかわらず、チョムスキーは、理論的仮設にしがみつぎ、現実を目をつぶるかのように、「こんなことは起こり得ないと思おうとしてきた」というのである。

4

このように、チョムスキーのような生物的アプローチからみて「言語」はすてさられる運命にある。それでは、チョムスキーとは正反対の立場である社会的アプローチをとる社会言語学に「言語」は救出先をもとめられるだろうか。ところが、社会言語学の立場からみても、「言語」はいたってあやふやなすがたしかしめさないのである。

社会言語学は、言語を抽象的で静態的な文法体系とはとらえない。むしろ、具体的な言語現象が社会のなかでどのようにあらわれているかに目をそそぐ。フィッシュマンの定式化 (Fishman, 1965) をすこし拡張するというなら、社会言語学は「いつだれがどこでどのようになにをだれにたいして話すか」という問いを根本

的な問題とするのである。

ところが、そうすると、おなじひとつの「○○語」とみなされることはであっても、話し手の所属する社会階層や出身地域、会話がおこなわれる場面や会話のテーマ、発話のスタイルなどによって、ことばははなはだしい多様性をしめすことが具体的にわかってくる。さらにつきつめていえば、だれひとりとしておなじ「言語」を話しているわけではないし、おなじ話し手でも対話者や状況によってさまざまなことばをつかいていているのである。そこに同一の「言語」のすがたなどは、とても見いだすことができない。

ハドソンは、社会言語学があつかうべきなのは、具体的な言語使用の状況をつくる諸要因によって決定された「言語項目 (Language item)」とその集合である「言語変種 (Language variety)」であるという。こうした立場からみれば、「英語、フランス語、ロンドン方言の英語、フットボール実況中継の英語、北西アマゾンのある特定の集団住居の住民が使う言語、ある特定の個人が用いる一つあるいは二つ以上の言語など、そ

れぞれ『言語変種』と呼ぶことができる」し、「『言語』『方言』『スタイル』と呼んでいるものを指して言うために、『変種』という一般的な用語しか残されていない」ことになる (Hudson, 1988, p. 40)。こうして、「言語」は社会的現実には根ざさない仮構物とみなされる。

この点でもっともおもしろい方向をとっているのはロイ・ハリスであろう。ハリスは現代言語学がひとつの「神話」のうえになりたっているという。言語学は言語体系が具体的な発話にさきだって存在し、「不変項 (Invariant)」からなる固定したコードであるとみなしているが、それをハリスは真っ向から否定するのである。ハリスはラング／パロール、コード／メッセージ、言語能力／言語運用という二元論をしりぞけ、ことばをつねにコンテキストのなかでとらえることを要求する。ハリスのいうコンテキストは、発話の生産と解釈を制限づける付随条件ではなく、そもそも発話を可能にする母胎そのものである。さらにハリスは、言語的記号と非言語的記号、音声と文字とのあいだに設けられた障壁さえとりはらっていく。こうしてハリ

スは、これまでの分離主義的言語学(ことばをコンテクストから分離してあつかうという意味)にかわる統合主義的言語学の確立をとなえるのだが、その点についてはここではくわしくはふれない。

ハリスは、統合主義的言語学にはこれまでの言語学が自明の前提としてきた想定は不要であると断言する。それにはつぎの五つのものがある。「言語記号は恣意的である」「言語記号は線のである」「語が意味をもつ」「文法がルールをもつ」「言語(languages)が存在する」。(Harris, 1990, p. 45)

最初のふたつの想定は拒否は、「言語記号の恣意性」と「シニフィアンの線条性」にもとづくシュールの「ラング」の概念の拒否を意味し、つぎのふたつは、話し手が精神のなかにある辞書と文法を参照して発話をつくり、聞き手はそのぎやくの道すじをたどって発話を理解するというコミュニケーション・モデルの拒否を意味する。それでは五番目はどういうことか。

ハリスはつぎのようにいう。「この最後の点は、逆説的にみえるにもかかわらず、はじめの四つから必然

的にうまれてくる。じっさい、はじめの四つの想定をなしですますということは、言語学は言語(languages)の存在をその理論装置として仮定する必要がないということとひとしい。いいかえれば、問題となっているのは、正統的言語学で定義されているような『言語(a language)』という概念が、そもそも分析の明確な対象と対応しているかどうかである。それが個人的であるか社会的であるか、制度的であるか心理的であるかは二の次である。もしそうした対象が存在しないとすれば、近代言語学は神話のうえになりたってきたという結論をくださないわけにはいかない。」(ibid.)

ハリスのとなえる「統合主義的言語学」では、いかなるコンテクストにもささえられずに存在する「言語」なるものしめるべき位置はまったくない。たとえば、ハリスのいう「統合主義的言語学」をおしすすめようとしているラヴは、「言語(a language)」は「一次的な発話についての観念から生じる二次的な構成物」である以上、「個人にとって一次的な現実になるこ

とはけっしてありえない」という (Love, 1990, p. 101)。しかしこれでは、「言語」を「人為的構成物 (artificial construct)」であるとみなすチョムスキーの見かたとかわりなくなってしまう。「言語」の廃棄という点では、生物的アプローチと社会的アプローチはうらで手をむすぶことができるのだ。じじつ、ペイトマンは、「言語 (a language) は言語的事実ではなく社会的事実」であるという理解をもとに、チョムスキー理論の価値をそこなうことなく、社会言語学的研究に接合させようとしている (Pateman, 1987)。

ただし、ハリス自身は「言語」の概念をやみくもに否定したのではない。ハリスはこういつている。「統合主義者は世間のひとびとが『〇〇語』と『××語』とのあいだにひくメタ言語的区別をはっきりとみとめる。なぜなら、その区別によって言語共同体のふつうのメンバーはみずからの言語経験をかたちづくっているからである。ふつうのひとびとが、いろいろな単語を『英語』とか『ドイツ語』とか『フランス語』とかに区別するとき、かれらはまちがっているのでも、道

をあやまっているのでもない。あやまりがはじまるのは、解明されるべき対象を正統言語学が理論的公理としてたててしまうときである。」(Harris, 1990, p. 49)

「言語」とはまさに言語についてのメタ言語的解釈からうまれる概念である。しかし、このメタ言語のはたす役割について、言語学は致命的な弱点をもっている。というのは、言語学においては、メタ言語的意識を発動させない話し手あるいは発話だけが真正の対象となっており、みずからのことばを意識しながら話すことは「不自然」で「人為的」なものである。この烙印がおされているからである。チョムスキーの立場にたてば、メタ言語的意識は脳に表示される「内的言語」の秩序をみだす要因でしかない。また、社会言語学においても、「ことはに最小限の注意しかはらわれない発話」こそが言語の現実をつくっているということがひとつの原理となっている (Wardhaugh, 1992, p. 19)。

それが「人為的構築物」とあるという理由で「言語」概念をすてさろうとする言語学には、「意識」が科学の対象を攪乱させる「人為的」なものであるとみる「自

然主義」のイデオロギーが浸透しているのであり (Joseph, 1987)、そこでは話し手がみずからのことばを意識することは禁じられているのである。

それでは、そのメタ言語的解釈とはいかなるものなのか。

5

ここですこしまわり道をしてみる。とりあえず構造言語学のいいかたにのっとって、言語は離散的記号からなる体系だとしてみよう。しかし、その体系がそのまま全体としての「ラング」と一致するわけではない。あくまで、音韻、形態、統辞、意味のそれぞれのレベルでみいだされる体系の集合体が言語をかたちづくるのである。しかし、すでにのべたように、その体系は外部に依存しない消極的単位がつくる内的相互関係である以上、体系どうしをむすびつけ、それらをなんらかの全体にまとめあげる必然性は、体系それ自体のなかには存在しないはずだ。

言語は体系でありコードであるということはよくい

われるが、厳密な意味ではこのふたつの概念はけっしておなじ意味ではない。

エーコによれば、ほんとうの意味で「体系」をつくる「コード」とは、記号のひとつのレベルで離散的な関与項のつくる結合法則をさすが、ふつう「コード」とよばれるものは、これらの個々の体系間の要素を相互にむすびつける規則をさす。エーコはこの混同をさけるために、前者を「体系コード」、後者をたんに「コード」とよんで区別すべきだという (Eco, 1980, pp. 56-57)。この観点からみれば、音韻、形態、統辞、意味のそれぞれのレベルにおいては閉じた「体系コード」が存在するが、全体としての「言語」はけっして閉じた「体系」をつくっていないのである。

さらに、そのように構造的機能の観点だけからとらえた「言語」は、現実の「言語」とはことなる次元に存在する。コセリウは、記号の抽象的体系である機能的言語と、固有名詞を冠して呼ばれる現実の歴史的言語とを区別する。前者はことばの地域的・社会的・文体的多様性のなかのただひとつのレベルだけについて

存在するが、後者はそれら複数の機能的体系の「複雑な綜合体」「寄せあつめ」であり、けっして「一個の言語体系として記述できな^ら」のである (Cosertiu, 1979, pp. 251-55)。それではどうやって「機能的体系」が寄りあつまって「歴史的言語」がつけられるのだろうか。

この点に肉薄したのは、プラハ学派のホラレックとボガトウイリョフしかない (Horálek, 1948)。かれらによれば、言語のそれぞれのレベルでの体系の要素は限定した機能しかもたないが (たとえば音素は意味弁別の機能)、それらの機能があつまって言語の全体としての機能をかたちづくる。それをホラレックとボガトウイリョフは「諸機能の構造の機能」、てみじかに「一般機能」とよんだ。このさい注意すべきは、それぞれのレベルの体系の機能が加算的にあつめられるのではなく、「この構造をつくる構成要素とははっきり区別されたあらたな機能」(ibid. p. 422) がつけられるということだ。

「一般機能」のもっとも重要な役割は、言語に全体性を付与し、言語における「われわれ」の意識を強調し

することである。個々の体系のレベルでみれば、言語はコミュニケーションのための中立的道具であるにすぎない。それらの上位にたつ「一般機能」のはたらしきによってはじめて、ほかのだれのものでもない「われわれの母語」という観念がつけられるのだという。

「諸機能の構造の機能によって言語は一体性をおびた文化的形成体となる。……『諸機能の構造』の機能という概念は、われわれに言語を調和的形成体、自律的文化価値としてかんがえることをうながす。」(ibid. p. 424)

問題があるとすれば、この「一般機能」が、言語をつくるさまざまな体系の機能から予定調和的につくりだされるものと見られかねないところにある。これはおそらく、「機能」を構造に内在する目的性と解するプラハ学派独特の機能概念がわざわざいしているだろう。こうなると、「言語」は音韻体系というもっとも下位の基礎にもとづき、それぞれのレベルでの「構造」の媒介を経ながら、「一般機能」という頂点にいたるといふピラミッド型のヒエラルキーをもった調和的全体をつ

くることになる。

むしろ事實はぎゃくではないだろうか。体系どうしはなんの根拠もないままにたがいに衝突と混交をくりかえし、そのときはや体系は体系でなくなる。そうした体系間の衝突と混交をふせぎ、すべてが一個の調和的体系のなかにしかるべくおさまることを保証させるのが「一般機能」ではないだろうか。じつは一般機能がそれとしての機能を發揮するのは、諸体系を統合するという以前に、「○○語」を対象として設定するメタ言語的機能をはたしたときなのである。

諸体系が統合されることで「○○語」がうまれるのではなく、メタ言語によって「○○語」が存在するとみなされることによって、言語の諸体系が統合されているかのような外観を呈する。「○○語」とはそれ自体で独立して存在する概念ではなく、「○○語」について語る「メタ言語的言説のちからによって実在化されるのである。「言語の一般機能」を行使するのは、「○語」の概念そのものではなく、ある社会のなかで「○○語」について語る一連の言説群である。

そうした言説群のなかでもっとも強力なものは、ほかならぬ言語学であろう。たしかに、言語学者は「一般機能」によって現実化された「○○語」を対象にすることで、はじめて安心して言語体系の分析にとりかかることができる。こうして言語学は、それが自明の対象であるかのように「○○語」について語りつづけるが、じつは「○○語の文法」「○○語の歴史」「○○語の起源」を語るという言説行為によって「○○語」の概念を生産しつづけているのである。

ロトマンは、文化的記号体系のダイナミズムは、ある段階でみずからの体系の秩序を整理し規範化する必要にせまられるという。そこで、ある視点から一定のメタ言語によって「記号体系の自己記述」をおこなうことで、体系に全体性と安定性があたえられる。そのさい、体系の統一性をみだす要素は「存在しないもの」とみなされ排除の対象となり、ぎゃくに「メタ言語」のほうが現実存在そのものとみなされる。「自己記述」ということの意味は、「この場合、メタ言語は体系に外的なものではなく、その下位類を構成する」という点

にある。(Lotman, 1980, p. 14)

この観点からみれば、「言語」にたいするメタ言語的解釈は、けっして「言語」の外にある付属物ではなく、「言語」内部にそれ相当の位置をしめる。「○○語」についてだれがなにを語ろうと、「○○語」はかわることなく存在するわけではない。したがって、「○○語」は一次的現実にもとづく二次的仮構物ではない。それは言語においてメタレベルと対象レベルがたえず反転することによってあらわれるそれ自体独自の「現実」なのである。

みずからを説明するメタ言語を下位体系としてふくむという離れ業、言語にたいするメタ言語的解釈が言語そのもののなかにくみこまれていくという倒錯、これはほとんどパラドックスそのものである。「クレタ人のうそ」のパラドックスは、対象言語とメタ言語を区別すれば容易に解決する。ところが、言語においてはそのはいかない。ソシュールのいう「言語学におけるあらゆる出発点の必然的な不在」は、「言語の自己言及性そのもののなかにやどっているのである。」

参考文献

- Chomsky N. (1984). 『ことばと認識』井上和子他訳、大修館書店。
- Id. (1986). *Knowledge of Language*, New York, Praeger.
- Id. (1989). 『言語と知識——マナツア講義録』田窪行則他訳、産業図書。
- Coseriu, E. (1979). 『一般言語学入門』下宮忠雄訳、三修社。
- Davis, H. G. and Taylor J. T. (1990). *Redefining Linguistics*, London, Routledge.
- De Mauro, T. (1976). 『ニンターレ一般言語学講義校注』山内貴美夫訳、而立書房。
- Eco, U. (1980) 『記号論1』池上嘉彦訳、岩波書店。
- Fishman, J. A. (1965). Who speaks what language to whom and when?, in *La Linguistique 2*, pp. 67-88.
- Harris, R. (1980). *The Language Makers*, Ithaca, Cornell U. P.
- Id. (1990). On Redefining Linguistics, in Davis and Talor (1990).
- Hjelmslev, L. (1943). *Langue et parole*, in Hjelmslev, *Essais linguistiques*, 1971, Paris, Minuit.
- Horálek, K. (1948). La fonction de la "structure des

fonctions" de la langue, in Yachek (1966).

Hudson, R. A. (1988). 『社会言語学』松山隆秀他訳、未
来社。

Joseph, J. E. (1987). *Eloquence and Power*, London,
Frances Pinter.

Lotman, J. M. (1980). *Testo e contesto. Semiotica dell'
arte e della cultura*, Bari, Laterza.

Love, N. (1990). The Locus of Language in a
Redefined Linguistics, in Davis and Taylor (1990).

前田泰樹(編訳) (1989). 『社会言語学』書肆
田。

丸山圭三郎 (1983)。『シムールを語る』岩波書店。

Pateman, T. (1987). *Language in Mind and Language
in Society*, Oxford, Clarendon Press.

Saussure, F. de (1972). *Cours de linguistique générale*,
Paris, Payot. (英訳『一般言語学講義』小林英夫
訳、早稲田)

Vachek, J. (1966). *The Linguistic School of Prague :
An Introduction to its Theory and Practice*,

Bloomington, Indiana U. P..

Wardhaugh, R. (1992). *An Introduction to Sociolin-
guistics*, 2nd ed., Cambridge, Blackwell.

(一橋大学助教授)